

夏

白刻む片眼の爺や初夏の家

秋

秋風や身に慾もなし金もなし

冬

澄み切つた空に一つの冬の月

◇…………◇

銃後歎吟

維由紀

兵がみなきほひて立てばシグナルの紅き光はこゝろを突くも

堪へ難き罵倒を浴びる心持して入營兵士の傍をよぎれる

膝骨神經痛とふ病を持ってば歡送の旗見送りて思ふかなしさ

銃眼に立ちふさがりて敵陣へ躍り込みたるわれを夢見ぬ

戦の後を統べるてだてとてむづかしき世のおきて定りぬ

林を出ると平坦な山道である、四邊は何處を見てもどんよりとした空に覆はれた山ばかりである。少し上りになつた、上衣を脱いで肩にひつけて急ぐ路は段々下りになつて來た。ふと見ると向ふに何か白いものが落ちて居る。近付いて見るとハンケチだつた、これはきつと前に行つた人が落したのだらうと思つて拾ひ上げて更に急いだ、向ふの角で白い着物らしいのが一寸見えた確かに人だ、小走りに近寄れば案の定三十位の男と學生らしい人と二人連である、たまらなくなつて大聲で呼びかけた「あなたハンケチを落しませんか」といふと向ふの人も振返つた僕と同じやうにしばらく誰とも會はぬからか何となく人懐かしげである「いゝえ落しません」「さうですか一暫く無言。「七面山へ御參詣ですか」「はあ」「あなたも」「え、一寸した會話により數年來の知己のやうに親しく語り合ひ五十丁上りの嶮路もお互に勵ましあひ七面山の本殿に着いたのが四時だつた。奇しくも忘れ難いハンケチが結んだ道連である。(中略)